

カポーティ

2006(平成18)年7月10日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★★



監督＝ベネット・ミラー／原作＝ジェラルド・クラーク／出演＝フィリップ・シーモア・ホフマン／キャサリン・キーナー／クリス・クーパー／クリフトン・コリンズ Jr.／ブルース・グリーンウッド／ボブ・バラバン／マーク・ペレグリーノ (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント 配給／2005年アメリカ映画／114分)

……「ノンフィクション・ノベル」という新しいジャンルの小説『冷血』を、カポーティが完成させたのは、一家4人惨殺事件の殺人犯ペリーの取材にもとづくもの。しかし、ペリーを支援しつつも、小説を完結させるためにはペリーの死刑執行が不可欠……。すると、作家カポーティが真に望んでいたものは、一体ナニ……？ そして、『冷血』完成後の彼の生き方は……？ そんな重く難しいテーマを、カポーティ役で見事アカデミー賞主演男優賞を受賞したフィリップ・シーモア・ホフマンが熱演しているが、日本ではやっと今秋に公開。それは、日本人受けのするハリウッド流のド派手な映画ではなく、地味で重いテーマを扱った作品だから……？ それならそれで、グツタリと疲れることを覚悟のうえで、じっくりと鑑賞したいものだが……。

アカデミー賞主演男優賞の映画を今……

『カポーティ』は第78回アカデミー賞(2005年度)で、主演男優賞、作品賞、監督賞、助演女優賞、脚色賞の主要5部門にノミネートされた。そして、作品賞は『クラッシュ』(05年)に、監督賞は『ブロークバック・マウンテン』(05年)のアン・リーに、そして助演女優賞は『ナイロビの蜂』(05年)のレイチェル・ワイズに、脚色賞は『ブロークバック・マウンテン』のラリー・マクマートリーとダイアナ・オサナにそれぞれ譲ったものの、主演男優賞については『ハッスル・フロー(原題)』(05年)のテレンス・ハワード、『ブロークバック・マウン

テン』のヒース・レジャー、『ウォーク・ザ・ライン 君につづく道』(05年)のホアキン・フェニックス、『グッドナイト&グッドラック』(05年)のデイヴィッド・ストラザーンに競り勝って(?)、見事フィリップ・シーモア・ホフマンが獲得した。

ふつうアカデミー賞作品といえ、遅くともその賞が決まる3月末には日本でも公開されているはずだが、なぜか(地味だから?)この『カポータィ』は今秋日本でロードショー。私はそれを一足早く試写室で観たが……。

カポータィとは?

トルーマン・カポータィ(1924~1984年)とは、自ら「ノンフィクション・ノベル」というジャンルを「発明」して、1966年に発表した小説『冷血』によって、アメリカ文壇にセンセーションを巻き起こした作家の名前。といっても、日本人にはなじみが薄いし、私自身全く知らなかったが、オードリー・ヘップバーン主演の映画『ティファニーで朝食を』(61年)の原作である中編小説『ティファニーで朝食を』を、1958年に発表して注目を集めたといえ、**「なるほど」とわかりやすいかも……。**

パンフレットによれば、カポータィは、①自家用ジェット機で世界を駆け回るセレブリティを指す「ジェットセット」の元祖であり、②マリリン・モンローやエリザベス・テイラーなどと親しい社交家であり、③『冷血』の成功によって、1966年11月28日ニューヨークのプラザホテルで開かれたカポータィ主催のパーティーは、“ブラック・アンド・ホワイト・ボール(黒と白の舞踏会)”と呼ばれる伝説のパーティーとなっている等々、いくつもの話題の持ち主とのこと。ちなみに、パンフレットには**「100の顔を持つカポータィ」**を、「社交界の花形・売れっ子小説家・ハリウッドに愛された脚本家・人を惹きつける話術の持ち主・人を激怒させる毒舌家・不世出の天才・庶民のアイドル・ゴシップの帝王・モンローが心を開いた男」と表現している。へえ、そんな作家がアメリカにいたんだ……。

『アラバマ物語』との接点は……?

パンフレットによれば、17歳の母親の子供としてカポータィが生まれたのは、

ルイジアナ州ニューオリンズだったが、3歳の時両親の離婚により、ルイジアナ、ミシシッピ、アラバマなど南部の各地を遠縁の家に厄介になりながら育ったとのこと。そしてこの映画に、カポーティの良き理解者として登場する女流作家、ネル・ハーバー・リー（キャサリン・キーナー）と幼なじみで、彼女が書いた『アラバマ物語』の中に登場する「ディル」は、彼がモデルになっているとのこと。

映画『アラバマ物語』（62年）は、1930年代の黒人差別の強い南部アラバマ州の田舎まちで起きた、白人の少女に対する「ニグロ」によるレイプ事件がテーマ。これを「デッチあげ」だと主張するグレゴリー・ベック扮するクールで知的な弁護士が、さまざまな迫害と陪審員の意識の中にも強く残る黒人差別と闘っていく姿は感動的なものだった。

映画のテーマは『冷血』の誕生秘話……？

この映画は、1958年に『ティファニーで朝食を』を発表して名声を高めたカポーティ（フィリップ・シーモア・ホフマン）が、その翌年の1959年11月15日に発生した、カンザス州で農業を営むクラッター一家4人の惨殺事件を報じる新聞記事に目をとめたところから始まる。作家というのは何とも因果な商売（？）で、家長は喉をかき切られ、他の者は手足を縛られ顔面を銃で撃たれるというこの凄惨さわまりない殺人事件にカポーティは「興味」を持ち、事件を取材して小説にしたいという欲求が生まれたわけだ。その後のカポーティの行動は素早いもので、ザ・ニューヨーカー誌の編集者ウィリアム・ショーン（ボブ・バラバン）の許可を取りつけ、幼なじみのネルとともに、取材のためにカンザス州へ向かった。

当初は取材に苦労したものの、捜査部長のアルヴィン・デューイ（クリス・クーバー）の妻マリー（エミー・ライアン）がカポーティの作品のファンであったことが幸いして、カポーティはデューイ家の夕食に招待されたうえ、デューイから現場写真を見せてもらうという協力も……。さらに、12月30日には容疑者としてペリー・スミス（クリフトン・コリンズ Jr.）とディック・ヒコック（マーク・ペレグリーノ）が逮捕されたことを受けて、カポーティはペリーと面会することにも成功。ペリーがずっと社会の底辺にあって、疎外されてきたことに同情するとともに、彼の人間性に惹かれるカポーティだったが、同時に冷静に小説家とし

ての目も……。

そんな中でも裁判は進み、陪審員は全員一致で有罪と判断し、ペリーとディックは死刑判決を受けることに。さて、カポーティのその後の取材と執筆活動は、順調に進展するのだろうか……？ そんなカポーティによる『冷血』誕生にまつわる秘話が、この映画のテーマ……。

実在の人物を演ずる役者たち……

この映画はこんな『冷血』誕生にまつわるさまざまな物語を描いたものだから、登場人物たちはすべて実在した人物。それがはるか昔の歴史上の人物であれば、監督や俳優なりの解釈でその役を演じることができるが、数十年前の実在の人物となると、やはり基本的にはそれに似せようと思うのが人情……。したがって、パンフレットの「プロダクションノート」の中には、名優たちのそんな苦労話があればこれと……。

とりわけ、カポーティを演じて主演男優賞を受賞したホフマンの熱演はすごいもので、100の顔を持つカポーティ特有のゼスチャーやクセを徹底的に研究し、まさにカポーティになりきっている感じ……。映画鑑賞中ずっと気になっていたのがその甲高い声だが、後でパンフレットを読むとやはりこれは本来のホフマンの声ではなく、カポーティになりきるための演技用の声。役者って声まで変えることができるんだ……。

作家の苦しみとは？ カポーティはペリーに何を望んだのか？

パンフレットには、作家塩野七生氏の「映画『カポーティ』について～作家や編集者や新聞記者には必見の作品～」と評論家川本三郎氏の「神は才能に苦しみを与える」という2つの興味深い解説があるが、そこに書かれているテーマは2つとも作家の苦しみ。つまり、カポーティが犯罪者であるペリーに共感を覚え、同情し、人間的に惹かれたことはまちがいないとしても、彼をホントに救いたかったのかどうかは疑問だという問題提起……。カポーティは作家として人間ペリーやその行動を観察し、分析し、文章にするために利用しようという気持があったこともまちがいない。したがって、作家カポーティにとっては、上訴が棄却さ

れ、ペリーの死刑執行がされることが不可欠だったのだ。

このことを塩野氏は、①悪魔に魂を売る覚悟も用心が必要だ、②傑作には不可欠の「毒」も、適正度を忘れようものなら殺される、③創造という行為はセイレーンの歌声にも似て魅力的だが、歌声に魅了されすぎると舵取りを誤って崖に激突する、と実に鋭く指摘している。さらにパンフレットの中にある、「監督ベネット・ミラーと脚本家ダン・ファターマンの会話」も同じテーマを論じており、カポーティは芸術家として持っていた当然の「欲」のために、実際にはペリーを助けたくなかった、それがこの映画の主題だと話している点も興味深い。カポーティはペリーに一体何を求めたのか、それをじっくりと考え、突き詰めていくことが大切だ。

圧倒される絞首刑の執行シーンの迫力！

アメリカでは50州のうち37州で死刑制度が存続しているが、その執行方法は1987年のアムネスティ・インターナショナルの調査によると、注射刑17州、電気イス15州、ガス殺刑7州、絞首刑4州、銃殺刑2州となっている（複数の方法で行っている州が8州）。『グリーンマイル』（99年）は電気イスだった（『シネマルーム1』34頁参照）が、この映画でのペリーの死刑執行は絞首刑。カポーティは、一方ではペリーの上诉のための弁護士を依頼してペリーの死刑執行を防止しようとしていたが、小説の完成のためには死刑を執行してもらうことが不可欠……。そんな矛盾する「期待」を持っていたカポーティが、ペリーの控訴が棄却されたと聞いた時の気持は、さて……？

死刑執行を控えたペリーと面会できたカポーティだったが、その面会時間はわずか5分。その5分間の面会に、カポーティはどんな気持で臨み、どんなことを話すのだろうか……？ また、私は司法修習生時代に1度、絞首刑を執行する部屋を見学したことがあるが、さてアメリカではどんな部屋で……？ この映画における絞首刑による死刑執行シーンの迫力は、圧倒されることまちがいない……。死刑執行に立ち会ってくれというペリーの言葉にしたがって絞首刑を目撃したカポーティは、果たしてこれをどのように受けとめ、自分の作品に活かすのだろうか……？

名作だが、しんどいよ……

この映画はアカデミー賞作品賞、監督賞にノミネートされただけあって、見ごたえのある名作であることはまちがいないし、フィリップ・シーモア・ホフマンをはじめとする俳優たちの演技力も抜群。しかし、テーマがテーマだけに映画自体が非常に重く、観ていてしんどくなることもたしか……。したがって、2時間弱の映画だが、観終わった時はグツタリ……？

いつもハリウッド製のド派手な娯楽大作を批判している私だが、こういうしんどい映画を観ると、たまには何も考えずに楽しむことができるそういう映画もいいものだと、勝手な感想を……。みなさんにも、しんどいことを覚悟で、是非この名作を鑑賞してほしいもの……。

2006(平成18)年7月11日記

ミニコラム

死刑求刑事件の弁護人の苦悩は？

私は弁護士として殺人事件を担当したことはあるが、死刑求刑事件は1度もやったことがない。また親しい友人による犯行でもない限り、受任するつもりもない。

小林薫被告による小1女兒殺害事件は同期の弁護士が担当したが、昨今の厳罰化を求める世論と犯罪被害者の権利を擁護する風潮の高まりの中、奈良地裁は06年9月26日求刑どおり死刑の判決を言い渡した。しかし、最高裁が1983年に示した「永山基準」によれば、被害者が1人の場合死刑は適用されないはず。判決は「数だけをもって死刑

を回避すべきではない」と判示したが、法曹関係者の「常識」ではこれは異例だから、弁護人が即日控訴したのは当然。被告人の控訴取り下げにより死刑が確定したが、弁護人の心境は？

メディア時代となった昨今、私が怖いのは、1人1人が自分の意見を持たず、洪水のように流れてくる1つの価値判断に盲目的に従うこと。ルネサンスを経験せず、島国に安住している日本人にはその傾向がとりわけ顕著。さて、あなたが小林被告の弁護人だったら、死刑判決をどう受けとめる？

2006(平成18)年11月22日記

メイキング・オブ・シネマ11～表紙撮影ウラ話～

(1) 記念すべき『パート10』の表紙は左手に映画検定4級の合格証を持ち、右手を高々と天に突き上げた笑顔の私だったが、気づいてほしいのはその周りを囲む9冊の本の表紙。『パート1』は別として、『パート2』以下を見れば表紙づくりにいかに苦勞しているかわかるはず。『パート4』と『6』は文芸社のイメージ優先だったが、その他をすべて私の顔写真にしているのはこの本はあくまで私の「個性の発露」というこだわりのせい。『パート8』と『9』は素人写真だが、その他はすべてプロのカメラマンによる撮影。表紙づくりの努力を重ねるうちに、私のモデルとしてのキャリアが次第にアップしてきたことは確実。

(2) 『パート6』を大きく紹介してくれた05年6月3日付産経新聞に続いて、06年11月20日付日経新聞夕刊は、『パート10』を手を裁判所の前で微笑む私の写真入りで、「法曹の目で映画評論」と題する大きな記事を掲載してくれた。そのテーマは09年から実施される裁判員制度だが、『レインメーカー』や『ニューオーリンズ・トライアル』等の映画ネタ中心の話題となったのは当然。『シネマルーム』の出版が相次ぐ中、新聞社からの取材が多くなったおかげで、カメラ目線を意識した

ポーズや笑顔も次第に手馴れたものに……。

(3) そんな中、続々と続くであろう『パート11』以降の表紙をどうするかがテーマとなり、①試写室シリーズ②旅行シリーズ③裁判所シリーズ④素顔シリーズ等の案が出され、大筋は④でいくことに。その結果新たなスタートとなる『パート11』の表紙は、今や身体の一部となった千円のリュックを肩に、愛車のママチャリにまたがり、さっそうと大阪市内を駆け巡る私のイメージを伝えたいとの思いによって、わが西天満コートビルの前で微笑む写真とすることに。ちなみにリュックの中身は法廷用の資料だが、カゴの中に入っているのは『キネマ旬報』。キムタクファンならその表紙の顔は公開間近の『武士の一分』に主演した木村拓哉クンだとわかるはず。これは決して私の笑顔を彼と対比するためではなく、私の愛読書を皆様にも知ってもらいたいため。

(4) さて、こんな苦勞を重ねて完成した『パート11』の表紙はいかがだろうか。「ナニワのオッチャン弁護士」がこんな姿で大阪市内を駆け回っている姿を見れば、是非お声をかけてもらいたいものだ。

2006(平成18)年11月22日記